長十七年以後再興されなかった、ものと思われる。

〔註〕

(1) 慶長一九年寂八一才（同寺過）

(2) 写本、筆者蔵

(3) 大網白里、中古家蔵

楞伽経における訳経史上の一問題点

清水要晃

『楞伽経』は経録に見る限り、次に記す様に四回翻訳されているが、現存するものは三訳の四訳三存の経典である。

(イ)曇無讖訳・楞伽経四巻…涼訳〈欠本〉

(ロ)求那跋陀羅訳・楞伽阿跋多羅宝経四巻…宋訳

(ハ)菩提流支訳・入楞伽経十巻…魏訳

(ニ)実叉難陀訳・大乗入楞伽経七巻…唐訳

ところで、『唐訳』には女帝・則天武后の序が冠せられているが、その中に於て『唐訳』訳出について、

三陽宮内重出二斯経一　討二三本之要詮一　成二七巻之了教一（大16・587上）

と記されている。即ち、七巻の訳出に際し、三本のものを参照したと見る事ができるが、三本が何を意味するものか不明瞭である。『唐訳』翻訳の様子を記すものには、他に法蔵の『入楞伽心玄義』がある。（以下『心玄義』と略記）『唐訳』は実叉難陀一人の手によるものではなく、復礼、法蔵等の者と共に訳出されたもので、その法蔵が『心玄義』中に次の様に記している。

今則詳二五梵本一　勘二二漢文一　取二其所得一　正二其所失一（大39・430中）

この文章は、先の序に云う三本とは明らかに矛盾している。『心玄義』では五梵本二漢文によって『唐訳』をなしたと記されるものが、序では三本のものによっているとしているのである。序の三本とは何を指しているのであろうか。この疑問は既に鈴木大拙博士によって提示されているものであるが、小稿では、この点について更に若干の検討、推論を加えるものである。

先ず、序の三本であるが、これにどの様な解釈が可能であろうか。第一に漢訳三本、第二に梵本写本三本の見方が考えられる。然し、序の三本を漢訳と見ても『心玄

義』の「二漢文」によって否定され、又、三本の梵本写本と見ても「五梵本」の記述によって否定されてしまう。『心玄義』の二漢文は、同書に『宋訳』『魏訳』についての批評を記す（大39・430中）も、『涼訳』についての言及がない事から、『宋訳』『魏訳』を指している事は明らかである。又、序に於ても

原此経文　来レ自二西国一　至二若元嘉一建レ号　跋陀之訳未レ弘　延昌紀年　流支之義多レ舛（大16・587上）

と『宋訳』『魏訳』についてのみに触れ、『涼訳』には触れていない。以上の事から、序の三本のうちの二本は『宋訳』『魏訳』の二本ではないかと推定される。とすれば、残る一本は梵本写本と解される。宋の宝臣による『注大乗入楞伽経』の序には、先ず、則天の序を引用し『宋訳』『魏訳』に触れ、更に「会二三本文一（上二本並一梵本）勤二成七巻一」（大39・434中）と同上の見解を示している。然し、二漢文は『心玄義』と一致するにしても、一梵本は不一致である。この様に三本を「二漢文一梵本」とする見方も否定されるのであるが、それでは則天の序の三本を説明し、かつ、『心玄義』の五梵本二漢文にも矛盾しない解釈はないのであろうか。

三、五、二の数の会通は困難であるが、私は一つの仮説をこの問題にあてはめて解釈してみたい。それは二漢訳一梵本の説にヒントを得たもので、序の三本のうち二本は『宋訳』と『魏訳』、残る一本は単数を意味する一ではなく、校定に用いた梵本写本全般を指す一本と見る仮説である。則天の仏教に対する関心は比較的強いと見られるが、異国の梵本写本にどれ程の関心を持っていたかは甚だ疑問である。則天にとっては既存二本の漢訳の外には、他に梵本写本が何本あろうが、全て「来レ自二西国一」原文として一括してしまったのではないだろうか。この仮説、推定の一論拠として、則天の文字に対する異常な程の情熱を挙げてみたい。則天はその治世中に役職名、役所名の改変を頻繁に行っているが、特に目につくものは改元の数である。治世中の改元は光宅、垂拱、永昌、載初等十七回を数え、西暦六九五年には證聖、天冊万歳、万歳登封と、一年間に三回も改元をしている。変異ある毎に改元するのは中国の常であるが、則天の場合は尋常でない様に思える。又、十七とも二十とも云われる則天文字の制定も、則天の文字に対する性格を示しているのではないだろうか。この様に、自国語の文字に対する情熱的性格を持つ則天であってみれば、異国の文字、梵本写本に関心がなくても不思議ではなく、異国の言

葉として全て一括してしまったとしても、それなりに理解できると思われる。又、一般的に当時の中国人が、訳了後の梵本には興味が薄い事をも考慮すれば、序の三本を『宋訳』『魏訳』の漢訳二本と、五本であったかも知れない梵本写本を一括して一としたものと考える事も可能ではないだろうか。

—未　完—

〈参考〉外山軍治著『則天武后—女性と権力—』

法華経における地涌菩薩の戯曲的表現と仏教思想史的意義（その二）

林　円　修

地涌の菩薩は教主釈尊の本化として末世弘通の主役として登場する菩薩で一切経中に例のない異色の菩薩である。（第二類）

古来先師によって教理的解釈がなされ、近年では布施博士が「布属の菩薩法」として解説されている。私は仏教思想の展開と実際問題をふまえて考察し法華経精神を知る裏づけとしたい。

原始法華経第一類（AD初～中頃）は開会思想で一貫している。声聞、縁覚の二乗を仏の方便説として開会し一仏乗を高揚する趣旨で、教団の実際問題が主題となっていることに注意したい。

第二類成立の頃（AD百年前後）となると教団の動向は教理思想の発展に伴って実際信仰も多岐化し大小乗各派の様相も複雑化して種々の対立も激化した。けだし末法思想が流行したのも当然といえよう。（主なもの挙げる。）

①舎利供養、経巻供養に伴なう塔や廟の建立供養（塔観問題）を始めとして　②菩薩思想の発達と新しい乗観問題…新しく菩薩乗が展開　③過去仏、未来仏信仰や浄土往生思想の流行　④仏身観の発達と諸仏諸菩薩信仰　⑤仏陀観教主観（本尊観）の差異と信仰上の問題　⑥人間の解脱観成仏観の主体的実践的な問題等々……法華経は会三帰一の出発的精神からも之らの課題に対決を迫られたわけである。法華経が独自の「多宝塔観」を示して塔観問題を解決したことからも知られる。（布施博士は第二類成立の主要因とせられる。）しかし今見る如く発展仏教の実情は塔観問題のみでかたずかぬ深刻な内容を示している。すなわち塔観問題は教団の実際問題として確